

神奈川支部情報

第25号

発行日 2013年2月15日

<発行者> 撫順の奇蹟を受け継ぐ会神奈川支部

ホームページ: <http://kanagawa.uketugu.org/>

<連絡先> 松山英司 TEL/FAX 046(871)4263

e-mail kan.mat.hid@tbc.t-com.ne.jp

郵便振込口座 00190-2-114578

「人のあかし」公演報告 <その1>

「人のあかし」公演は大成功でした。報告が大変遅れました。

昨年、11月30日から、撫順戦犯管理所を舞台にし、土屋芳雄さんをモデルとした芝居が、京浜協同劇団(川崎)で10回にわたって公演されました。毎回満席で、合計900人余の人が観劇しました。神奈川支部は脚本を書く段階から相談を受けていまして、当然のこととして全面的にバックアップし、協力してきました。

皆さんの感想文には「感動」「感激」「感謝」の文字が多く書かれています。劇団員の熱演に触発されて、目を真っ赤にして出てこられた人もおおいられました。自らの体験に基づく侵略戦争の真実を証言してきた、中帰連の方たちが示した歴史の真実が大きく広がりました。



私たち神奈川支部がこれまで20回近い証言集会を開催して、撫順戦犯管理所であった事実について多くの皆さんに知っていただくように努力してきました。当事者である中帰連の方々から直接、自分の目で見ながら自分の耳で聞いてもらうことこそがなによりも大切と考えて、愚直にそのことを貫いてきました。すでに、のべ2000人近い人が参加してくれていますし、他の市民団体の集会などに絵鳩さんや坂倉さんを案内したことなども含めると、3000人近い人に聞いてもらっていることになります。

この度の「人のあかし」公演は、このような神奈川支部の活動が、今回の公演にも結びついたものです。戦争で“鬼”になった人が、撫順戦犯管理所で“真人間”に戻った。そこには何があったのか。撫順戦犯管理所であった本当の事実をもっともっと知らなければならない。知らせなければならないと思います。

脚本家の和田庸子さんは、「私は中帰連について知っていましたが、だが芝居にするには難しいだろうな、という印象をもっていました」と仰っています。脚本を書くにあたって、中帰連の方たちの体験の重みをどう受けとめるべきかを悩み、考えたそうです。昨年、3月11日に発生した大震災と原発事故以降の動きのなかで、

「この社会がどうなってしまったのか。安全神話の崩壊が誰の目にも明らかににもかかわらず、原発を推進する大きな力がじっさいに動きはじめている。社会のあり方がおかしくなってしまったのではないか。そもそもその原因は、大震災と原発事故だけが原因ではないだろう。歴史のどこかでこの国は道を踏み間違えてきたからではないか」と考えたのです。

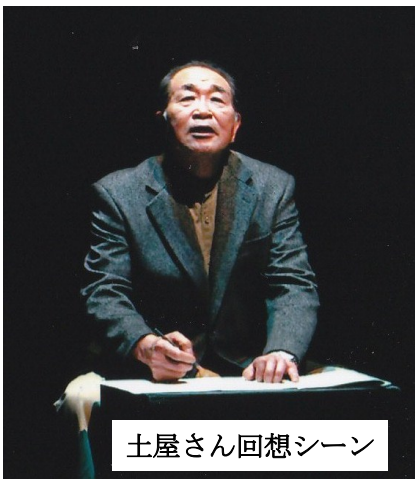
そして、その核心はあの中国や東南アジアへの侵略戦争の事実に、正面から向きあってこなかったことが大きな原因ではなからうか、結果このような考えに行きついた。だとすれば、“撫順戦犯管理所で何があったのか”という事実を多くの人に知ってもらうことが今ほど大切なときはない、と。このような考えに至ったといいます。

以来和田さんは中帰連関連の大量の書籍や資料を読みこんで、猛烈な勉強をはじめました。そして土屋芳雄憲兵の生き方をモデルにすることが最もふさわしいと判断されたのです。劇団の「人のあかし」制作ニュースに書かれている和田さんの文章の一部を、以下紹介します。

「撫順の奇蹟とは何か？ 戦争責任とは何か？ 土屋さんの半生を賭けた問いかけは、3・11大震災後の私たちの生き方に響いてくる」

開幕1か月前に、土屋憲兵を演じた護柔さんが座内紙に語っていました。

ちなみに私は、証言する元憲兵の役を演る事になった。渡部正一は山形県出身。自分も新庄市出身の



貧農の長男だがそのことが舞台上に反映出来ると信じて削っていくしかないなどと安易だが・・・この時期に自分で言うのもなんですが観て良かったと言える舞台の予感がしている。(お前が言うなヨと、ツッコミが聞こえそう) と。

「観て良かったと言える舞台の予感」がその通りに芝居に反映されていました。

京浜協同劇団はすでに50年の歴史を誇る、労働者の街川崎で育まれた市民劇団です。地域にしっかりと根を張って活動しています。毎回、遠くからもおおぜいの観客がかけつけています。

“撫順戦犯管理所で何があったのか”、この真実を社会に広く知っていただくのにはこの上ない機会であり、900名の観劇者の皆さんにそれは大きな感動とともに大きく広まりました。尖閣問題をめぐって日中間が厳しい状態にある今日、だからこそ真実を見つめなおす意義は計り知れない大きなものだったでしょう。

撫順戦犯管理所であったことを口で説明してもなかなか理解を得ることがむずかしいものです。今回の公演を観劇すれば一目瞭然です。公演終了後に、毎回時間のある方達に残ってもらって懇談会が行われました。また、アンケートには250名の方々が記入してくれました。撫順戦犯管理所のことについて、そこでなにがあったかについて、やはり「知らなかった」という感想がたいへん多かったのです。

じっさいにそうだと思います。感動的な感想文も多かったので、次回以降紹介します。今回の情報では劇団を支え、共に歩む、京浜共同劇団と共に歩む文化の仲間という熱心なグループがありまして、その機関紙「文化の仲間」に投稿して掲載していただいた記事を以下掲載します。

わが受け継ぐ会神奈川支部会員、尾崎隆一氏も特別出演しました。尾崎さんの出演体験の手記は、次号の神奈川支部情報で報告します。

「人のあかし」～ある憲兵の記録から～

公演をありがとうございました

「撫順戦犯管理所」ってどんなところですか？ そこで何があったのですかと、よく聞かれます。その答えが、第一場「坦白(タンパイ)」の場面がです。

「初年兵に度胸をつけさせるために、中国人捕虜を生きのまま刺し殺させました！」

「村民の皆殺しを命じ、逃げ遅れた老人、子ども、赤ん坊も銃剣で突きころさせました！」

「婦人を殺すとき、裸にして輪姦し、・・・・・・・・・・」

宮田の坦白はまだまだ続いた。聞くに堪えないこのような「坦白」が、人が変わってつぎつぎと続いた。「毒ガスで・・」、「ペスト菌の空中散布を・・」、「生体実験を・・」、「マルタを全員殺害し・・」、「ウサギ狩り作戦で・・」、「従軍慰安婦を・・」、とつづいて、最後に渡部正一が、「憲兵になってから、直接間接に殺した中国人は328人、逮捕し拷問にかけ、監獄につないだのは917人であります・・・」と証言したのです。



刺突訓練

そうなのです。撫順戦犯管理所で行われたこの「坦白」という事実こそが核心的なことであります、おおぜいの人に知っていただきたいことなのです。中国人を「虫けら」のごとくに扱って蹂躪してきた己の過ちを悔い、心の底からの反省の念がなければ、この「坦白」という行為には至りません。

和田庸子さんから脚本を見せていただ

いたとき、この場面からはじまる脚本の構成に、私はこの劇の“成功”を確信しました。そして稽古を見せてもらって、役者の皆さんの熱意と真剣さに接してそれはますます揺るぎないものになりました。

たしかに日本軍も多くの戦死者を出し、沖縄の悲劇や、ヒロシマ、ナガサキ、東京大空襲など、多くの国民が体験して甚大な被害を被っています。その体験を語り残すことはもちろん重要です。しかし、被害を受けた側からはなにを反省すればいいのでしょうか。

一方、日本軍が中国でなにをしてきたのかについては、芝居に出てきた宮田や渡部正一たちの証言は、中国全線での侵略戦争の膨大な事実のなかのホンの一部にすぎないことは明らかでしょう。撫順戦犯管理所を体験してきたごく少数の方たちを除いて、中国で戦争を体験してきた元日本兵のほとんどはこの事実について口をつぐみ、あの世へ持って行ってしまったことでしょう。すでにこの膨大な事実が「無かったこと」になってしまったのです。

それだけに、また逆に考えればこの「坦白」からはじまった貴重な“良心の灯火”を中帰連の方たちが残してくれたのだと思います。この度の「人のあかし」公演は、観劇された9

00人の人にこの“良心の灯火”を点火してくれたことだと思います。おおぜいの感想文に書かれていた「感動」「感激」「感謝」の文字がそれを表していると思います。

撫順戦犯管理所を体験してきた人たちは帰国後、中国帰還者連絡会（中帰連）、を結成して、今日まで営々と証言活動をつづけられてきたことは何ものにも代えがたい貴重な財産を残してくれました。

しかしもう一つどうしても忘れてならないことは、先の「坦白」に導いた管理所長や職員たちの献身性についてです。そして当時の建国間もない中国の指導者たちの指導についてです。第一場の最初のセリフが、通訳を介した所長の「皆さんはこの撫順戦犯管理所に来てそろそろ4年を過ごしたことになりますね」ということばを思いおこして下さい。そうなのです。「坦白」にいたるまでに4年の年月を要しているのです。しかもこの時点では、第六場で散髪を待ちながら「僕、宮田中隊長の坦白にはショックを受けましたよ！」「あそこまで言うのかって・・・おらドキンとしたよ！」という会話のような状態だったのです。その後、全員が「坦白」を終わって帰国するまでには、じっさいにそのあと2年近くかかっているのです。

戦争が終わって、シベリアへ5年間も抑留されて、「帰国だ！」とだまされて乗った貨物列車で中国へ引きわたされた約1000名は中国に引き渡されて撫順戦犯管理所に収容された。管理所では強制労働もなく、3食の米の飯で栄養管理から



散髪を待ちながら

健康管理まで至れり尽くせりの環境のなかで、しかしこのような環境が彼らを「坦白」に導いたわけではない。それはひとつの条件にすぎない。かつての敵、しかも身内を殺され、自らも傷つけられ、足蹴にされた日本軍への憎しみは、私たちの想像をはるかに超えるものがあるでしょう。こらえての献身的な管理所長以下の職員たちは戦犯たちの人間性を尊重した対応によって「坦白」にまで導いてくれたのです。

残念ながら、“良心の灯火”の証言者たちが、超高齢のために誰もいなくなる日もそう遠くありません。今のこの時期に行われた「人のあかし」の公演は、限りないほどの大きな意味があることでしょう。撫順の奇蹟を受け継ぐ会神奈川支部は、人のあかし公演に文化の仲間の皆さんとともに協力団体としてお手伝いさせていただいたことをこの上ない喜びとするものです。

脚本を書かれた和田さん、劇団の皆さん、文化の仲間の皆さん、観劇者のみなさん、すべての皆さんに感謝します。最後に、できることなら再演、再々演、出張公演を、と望むのは欲ばりでしょうか。

撫順の奇蹟を受け継ぐ会神奈川支部

松山英司

